
平成26年度 一次

桐蔭学園 中等教育学校・中学校 学力検査問題

国 語

平成26年2月1日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつを落としたり、体の調子が悪くなった時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 問題は20ページまであります。

- ① 次の一線部のカタカナを漢字に直して書きなさい。
- ② 良いジョウケンの仕事につく。
- ③ 工夫して時間をセツヤクする。
- ④ 災害に備えて食糧をチヨソウする。
- ⑤ 畑にヒリヨウをまく。
- ⑥ 小学校時代のオンシと再会した。
- ⑦ 蚕の繭から作られたキヌイト。
- 私はオサナいころから音楽が好きだ。

② 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

①「わかる」ことは、コミュニケーションを閉じる危険とつねに背中あわせです。

私たちが話をしている、つまらない相手というのがいますね。こちらの話をぜんぜん聴いていない人です。

なんで私の話を聴いてくれないかという、先方にはこちらの言うことが全部わかっているからです（少なくともご本人はそう思っているからです）。

その人にとっては、私は「いなくてもいい人間」なんです。だって、私の話はもうわかったから。「君の言いたいことはわかった」というのは、ですから「私の目の前から消えろ」という私の存在そのものを否定する（注）遂行的なメッセージを言葉外に発していることとなります。

「A」、私たちは「もう、わかったよ」と言われると傷つくのです。

聴き手に何の興味も示さないで熱く語り続ける語り手も、聴き手の存在を否定するメッセージを発信しているという点にお

いては変わりません。

そういう人の話を聴かされると、私たちは弱い酸に侵されるように、深いところで傷つけられます。たとえば、校長先生の朝礼の訓示とか、③式典に④来賓で来ている市会議員の挨拶みたいなものが、その典型です。そういうものを聴かされると人間は苦痛を感じます。

これは苦痛を感じるのが、人間として正しい反応なんです。

こういう話が私たちに苦痛を与えるのは、そこでもやはり「扉」が閉じられているからです。

「扉が閉じられたことば」というのは、先ほども書いたとおり、聴き手に向かって、「あなたはいなくてもいい」と告げることばのことです。「あなたが私の話の内容を理解しようと理解しまいと、あなたがいようといまいと、私は今と同じことを言うだろう」と告げられて傷つかない人はいません。

ときどき「ひとりうなずき」をする人がいますね。自分で話していて、自分の話に自分でうなずく。私は「ひとりうなずき」の語り手と対面していると、⑤気が滅入ってきます。言っていることが間違っているとか、⑥痛に障るとか、そういう次元のことではありません。「おまえが私の話に同意しようと反対しようと、私は私の話に同意する」というきつぱりとした「聴き手無視」の態度に毒されて、なんだかこっちの生命力がよろよろと萎えてきてしまうのです。

そういうものです。

目の前にいる人に「気づかわれている」と生きた心地ができて、「無視されている」とだんだん生命の炎が弱々しくなる。これはでも、人間として当然のことです。「シカト」といういじめ方が残酷なのは、そこにいる人間を存在しない人間のように扱うことで、「おまえはもう死んでいる」と無言のうちに告知しているからです。「殺してやる」というのなら、まだこっちは生きていますから、対処のしようもありますけれど、「死んでいる」と言われてしまうと、もう手も足も出ません。

私たちが傷つけ損なうコミュニケーションがどういふものがわかると、それをひっくり返すと、⑦私たちが⑧愉悦を感じ、生きていく実感が湧いてくるコミュニケーションがどういふものであるかもわかります。

私たちが聴いて気分のよくなることばというのはいくつかの種類がありますが、そのすべてに共通するのは（誤解を招く表現ですが）、そこに誤解の余地が残されているということですが。

⑥奇妙に聞こえるでしょうか？

【B】誤解の余地なく理解が行き届いたコミュニケーションではなく、誤解の余地が確保されているコミュニケーションこそが、私たちにコミュニケーションをしている実感をもたらしてくれるのです。

十代の若い人たちは、非常に会話の語彙が貧困です。これは、みなさんも認めてくれると思います。

「むかつく」とか「うざい」とか「きもい」とか「かわいい」とか、ほんとうに十個くらいの単語だけで延々と会話をして

いる女子高校生などを電車の中でみかけます。ふつうの大人の人は、そういうのを横で聴いて「近頃の若いもんは、なんという貧しい」ボキャブラリーで（注5）意思疎通を行っているのだろう。あんなことでちゃんとしたコミュニケーションが成立しているのであろうか」と苦々しい顔をしたりします。

まったく、おっしゃる通りです。

あれじゃ、意思疎通はできっこありませんね。

洋服を見ても「かわいい」、化粧を見ても「かわいい」、音楽を聴いても「かわいい」。

あれでは、そのような形容詞を交わし合っているもの同士でも、何を言っているのかお互いの心の中がわかっているとはとても思われません。「かわいい」のが洋服の色について言われているのか、デザインについて言われているのか、ボタン穴の微妙な位置関係について言われているのか、（注7）スリットの角度について言われているのか、「これ、かわいいね」「うん、かわいいね」だけじゃ、わかりっこありません。

……ほらね。

ちゃんと、若い人たちだつて、わざと誤解の幅があるように、コミュニケーションしているでしょう。

それこそがコミュニケーションの「王道」だからです。

形容詞十個だけのチョー貧しいコミュニケーションでは、お互いに「何を言っているのか、よくわからない」。だから、聴

く人間をつねに「不確かで曖昧な位置」にとどめおくことができる。それゆえに、これらの会話はコミュニケーションとして成立しているんです。

子どもたちが限定した語彙でしかコミュニケーションできなくなったというのは、【C】一つの「退行」現象ではあるのですけれど、人間というのは、本人にしかわからない切実なる理由があつて「退行」しているんですし、退行するときだつて、必ずそれなりのしかたで「戻り道」を確保しているんです（ヘンゼルとグレーテルが森の小径に撒いたパンくずみたいに）。

彼らのあのチョー貧しい語彙は、「自分の言いたいことをきちんと言いたい」といふ言われ方で、学校教育ですつと「正しい」とされてきた「自己表現」の強制に対する、子どもたちの側からの「ノー」ではないかと私は思っています。

「そんなことばづかいじゃ、コミュニケーションできない」、そういうふうに感じている子どもたちが、生半可な自己表現に自分を託すことを拒んで、ある種の失語症をみずから進んで病むことで、コミュニケーションを回復しようとしている。そんな気が私にはするのです。

（内田 樹『先生はえらい』より）

（注1）遂行的なメッセージ：自分の思い通りにやり通そうとする意志をふくんでいるメッセージ。

（注2）来賓：会や式などに招かれてきた客。

（注3）愉悦：心から楽しみよること。

（注4）語彙：ある人が用いることのできることばの全体、またその数。

（注5）ボキャブラリー：「語彙」と同じ。

（注6）意思疎通：考えや思いが相手に通じること。

（注7）スリット：衣服の細長い切り込み。

※ 本文中のことばをぬき出して解答する際に、ふりがなをつける必要はありません。

問1 本文中の空らん【A】から【C】に当てはまる語として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えないものとします。

- ア. たとえば イ. でも ウ. たしかに エ. だから オ. なぜなら

問2 線部㉞㉟の文中での意味として最も適切なものをそれぞれ後から一つずつ選び、記号で答えなさい。

㉞ 「^{かん}痛に障る」

- ア. 気にかかる イ. 気がつまる ウ. 気に入らない エ. 気がとがめる

㉟ 「苦々しい顔」

- ア. とても不愉快ふゆかいそうな顔 イ. とても心配しんぱいそうな顔
ウ. とても不思議ふしぎそうな顔 エ. とても苦しくるしみそうな顔

㊦ 「王道」

- ア. もっとも古典的な方法 イ. もっとも強圧的な方法
ウ. もっとも合理的な方法 エ. もっとも正統的な方法

問3 線部①『わかる』ことは、コミュニケーションを閉じる危険とつねに背中あわせです」とありますが、これはこの場合具体的にどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 「わかる」ということは、実際には語り手の考えを間違まちがって理解しているのに、それに気づかずにそのままになってしまう可能性が大きいということ。
イ. 「わかる」ということは、これ以上話を聞こうとしないという態度によって、語り手の存在を否定することにも通じてしまうということ。
ウ. 「わかる」ということは、語り手の心に対する思い入れが強すぎて、かたよった理解をしてしまう可能性が強いということ。
エ. 「わかる」ということは、語り手の考えを先回りして読みすぎることで、語り手にそれ以上話す気持ちをなくさせてしまうということ。

問4 線部②「校長先生」・③「式典に来賓きいひんで来ている市会議員」とありますが、「校長先生」「市会議員」は、ここではどのような人の具体例として挙げられていますか。本文中より二十五字以内でぬき出して答えなさい。(句読点などの記号も字数にふくめます。)

問5 線部④「気が滅入めいじゆってきます」とありますが、なぜ「気が滅入」るのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 聴き手である自分の存在を無視されているようで、語り手の話を聴こうという気力をなくしてしまうから。
イ. 語り手の一方的な論理に対して、聴き手である自分が何も反論できないという無力感におちいってしまうから。
ウ. 強引に相手の同意を求めようとする語り手の態度に対して、聴き手の自分は不快感をおぼえるから。
エ. 相手の考えていることがわかりきっているような語り手の態度が、聴き手の自分にはわずらわしく思われるから。

問6 —線部⑤「私たちが愉悦を感じ、生きている実感が湧いてくるコミュニケーション」とありますが、次の中でその例としてあてはまるものには「○」を、あてはまらないものには「×」を、それぞれ書きなさい。

ア. 語り手の言いたいことが理解できたと思つた時点で、それ以上の説明を求めることをやめるコミュニケーション。

イ. 語り手が聴き手の理解を得ようとして、聴き手の反応に注意しながら話すコミュニケーション。

ウ. 聴き手が語り手の考えに同意するまで、自分の考えをくりかえしていねいに述べるコミュニケーション。

エ. 聴き手が自分の話をどのくらい理解しているかを気にせず、語り手が自由に話すコミュニケーション。

オ. 聴き手が語り手の言いたいことを完全には理解できず、なお理解を深めようとして行うコミュニケーション。

問7 —線部⑥「奇妙に聞こえるでしょうか」とありますが、「奇妙に聞こえる」理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 生きている実感が湧いてくるコミュニケーションが理想的なはずなのに、自分自身を傷つけ損なうコミュニケーションが必要だとされているから。

イ. コミュニケーションの本来の目的は互いに誤解のない状態を目指すことだと一般には考えられているのに、誤解すること自体をコミュニケーションの目的にしてしまっているから。

ウ. 誤解を招く表現を使うことは、互いに正しく理解しあうことを本来の目的とするコミュニケーションのさまたげになるはずなのに、逆に会話のやりとりを活発にさせる原因になっているから。

エ. 誤解の可能性があるコミュニケーションを行うことで喜びを感じるとするのは、コミュニケーションとは正しく理解しあうことを目的にするものであるという常識に反するから。

問8 —線部⑦「若い人たちだつて、わざと誤解の幅があるように、コミュニケーションしている」とありますが、「若い人たちが誤解の幅があるようにコミュニケーションしている理由を、筆者はどのように考えていますか。本文中の語句を用いて二十五字以内で書きなさい。(句読点などの記号も字数にふくめます。)

③ 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

最初は旗だと思った。国旗のような長方形の旗ではなく、三角形のペナントが何枚か並んで、団地の一室のベランダに掲げられている。

少年は自転車に乗っていた。町の探検の途中だった。三月の終わりに引越してきて、まだ一カ月足らず——通学路からはずれたこの団地に来たのは、初めてだった。

自転車を停める。見上げると、なあんだ、と苦笑いが浮かんだ。旗ではなかった。竿をフェンスに掛けた、小さなこいのぼりだった。

部屋は三階だった。ベランダに干してある洗濯物の中に子ども服はなかったが、こいのぼりを揚げるのは男の子のいる家なんだという事は、少年も知っている。

三年生か四年生の子だったらしいな。男の子がたまたまベランダに出てくる、たまたま少年に気づく、少年が「よお」と手を挙げて笑うと、男の子も笑い返す、そして二人はなんとなく仲良くなって……そんな情景を思い浮かべながら、少年は自転車を停めたまま、①こいのぼりを見つめた。

風が強い。こいのぼりはしっぽまで伸びて、ばたばたと音をたてて泳いでいる。小さなこいのぼりだ。竿も細くて短く、一尾ぐらいなら片手に持って振り回すこともできそうだった。

風は少年にも吹きつける。埃っぽい風だ。団地の周囲に広がる畑の土が巻き上げられているのだろう、ときどき頬に小さな土のかけらが当たる。頬がぴりりとするたびに、目を細め、自転車のハンドルを強く握り直して、肩をすぼめた。

町の探検をするときには、いつも一人で自転車をとぼす。お母さんは知らない。少年は学校から帰るとすぐに「遊びに行つてきまーす」とはずんだ声で言つて家を出て、町をあてもなく自転車で巡つて、夕方五時のチャイムが鳴るまで時間をつぶしてから、②「ただいまーっ」とはずんだ声で家に帰る。

初めての転校だった。新しい友だちとどうなじんんでいけばいいのかよくわからなかったから、しくじった。最初はよかったのだ。クラスみんなは休み時間のたびに少年のまわりに集まって、前の学校のことをあれこれ訊いてきた。すっかり人気者

だ——と、勘違いしてしまった。気がゆるんだ。質問に答えるだけではなく、なにか面白いことを言つて、みんなを笑わせてやろうと思つた。前の学校や町のことを少し大げさに話した。この学校やこの町の感想もギャグのネタになるようにしゃべつた。すると、それが「いばつてる」「ここを田舎だと思つてバカにしてる」ということになってしまった。笑つてくれるはずのみんなは怒りだした。誰も少年の席には集まらなくなり、放課後のソフトボールにも誘つてくれなくなった。

「そんなに前の学校がいいんだったら、帰れよ、そっちに」——今日、聞こえよがしに言われた。言つたのは、少年の話に真つ先に腹を立てたヨッチちゃんだった。

男子のリーダー格のヨッチちゃんは、好きなテレビやゲームやマンガがどれも少年と同じで、おしゃべりをするときのテンポやノリもぴつたりで、クラスでいちばん仲良くなれるはずだった。親友になれたらいいな、きつとなれるだろうな、と楽しみにしていた一週間前までが、③いまは、ずっと昔のことのように思える。

知らないうちにうつむいてしまつていた。顔を上げ、こいのぼりをもう一度見つめて、まあいいや、とため息をついて自転車のペダルを踏み込みかけたとき、こいのぼりが一尾、空に泳ぎ出た。ぽかんと開けた口と竿を結んでいた紐が、ほどけたか、ちぎれたか、黒い真鯉が竿からはずれてしまい、風に乗って飛んでいったのだ。

少年はあわてて追いかけた。畑の真ん中にふわりと落ちたのを確かめると、自転車を乗り捨てて、ごめんなさいごめんなさいしようがないんです、と謝りながら畑に入った。★

団地の建物は古く、オートロックどころかエレベーターもなかった。陽のほとんど射さない階段はひんやりとして、カビと埃の入り交じつたにおいがした。

竿のあるベランダの位置を外から確認し、廊下に並ぶドアの数と照らし合わせて、奥から二軒目のドアのチャイムを鳴らした。

中から顔を出したのは、おばさんだった。少年のお母さんと変わらない年格好で、お母さんよりきれいで、そのかわり、お母さんより寂しそうに見えた。

こいのぼりが飛んでいったことを説明して、拾ってきたこいのぼりを差し出すと、おばさんはとても——少年が予想して

いたよりもずっと喜んで、感謝してくれた。

「ちよつと待っててね、お菓子あるから、持って帰って」

玄関の中に招き入れられた。おばさんは玄関とひとつづきになった台所の戸棚を開けながら、「何年生？」と訊いた。

「五年、です」

「……東小学校の子？」

（迷） げんそうに訊かれた。

少年がうなずいて、「転校してきたばかりだけど」と付け加えると、おばさんは、ああそうなの、と笑った。固まっていたものがふつとゆるんだような笑顔だった。

「ねえ、ボク、上がっていきなさい。おみやげのお菓子はあとであげるから、おやつ食べていけば？」

知らないひとの家に上がるのはよくない。お母さんにいつも言われている。

でも、五時のチャイムまではまだ時間があるし、断るとおばさんはまた寂しそうな顔で固まってしまいそうだし、なにより、少年は気づいていた。台所の奥の居間に男の子の写真が飾ってある。大きく引き伸ばした写真をきちんとした額に入れて、鴨居に立てかけて——田舎のおじいちゃんの家では、死んだひいおじいちゃんといひおばあちゃんの写真をそうしている。そして、部屋に染みついていっているにおいは、おじいちゃんの家でいつも嗅いでいるのと同じ……たぶん……きつと……。

うつむいて靴を脱ぐ少年に、おばさんは言った。

「せつかくだから、お仏壇にお線香をあげてくれる？」

おばさんの息子は、タケシくんという。④三年生の秋、交通事故で亡くなった。生きていれば東小学校の五年生——少年と同じ五年二組だったかもしれない。仏壇に供えられた超合金ロボやトレーディングカードは少年の好きなものと一緒だったから、仲良しの友だちになれた、かもしれない。

おばさんは東小学校のことをあれこれ教えてくれた。髪の毛の薄い校長先生のあだ名が「はげっち」だということ、秋の運動会に親子競技があること、冬になるとクラスでストープ委員を決めること、学校のプールは真ん中が深くなっていて背が立たな

いかもしれない、ということ……。

ヨツちゃんの名前が出た。胸がどきんとした。タケシくんのいちばんの友だちはヨツちゃんだったらしい。

「ヨツちゃんと同じクラスなの？　じゃあ、もう友だちになったでしょ。あの子元氣だし、面白いし、意外と親切なところもあるから」

タケシくんが小学校に上がって最初に仲良くなったのがヨツちゃん、最後まで——いまでもヨツちゃんは、ときどき仏壇にお線香をあげに来てくれるのだという。

「ヨツちゃん、いろいろ面倒見てくれるから、すぐに友だちになれたでしょ」

⑤少年は黙ってうなずいた。一週間前までは、確かにそうだった。通学路の近道も、学校でいちばん冷たい水が出る水飲み場の場所も、教室を掃除するときの手順も、ぜんぶヨツちゃんに教わった。

「そうかあ、ヨツちゃんと友だちかあ……」

おばさんはうれしそうに微笑んで、しみじみとつぶやくように言った。勘違い——でも、そんなの、打ち消すことなんてできない。

「じゃあ、タケシとも友だちってことだね」

おばさんはもつとうれしそうに言った。

少年がしかたなく「はあ……」と応えると、玄関のチャイムが鳴った。

外からドアが開く。

「おばちゃん！　こいのぼり、黒いのがなくなってる！　飛んでったんじゃないの！」

玄関に駆け込んできたのは、ヨツちゃんだった。

五時のチャイムが鳴るまで、少年はヨツちゃんと一緒にタケシくんの家にいた。

おばさんに「やろう、やろう」と誘われて、三人でテレビゲームをした。タケシくんの家にあったゲームはみな、少年も三年生の頃に遊んだものだった。タケシくんが生きてれば友だちになったよな、絶対そうだよな、と少年は思う。去年発売された

シリーズの新作はもつと面白い。タケシくんが生きてれば絶対にハマっただろうな。

ヨッチちゃんはゲームがうまかった。少年といい勝負——勝ったり負けたりを繰り返す二人を、「ひさしぶりにゲームすると、指と目が疲れちゃうねえ」と途中から見物に回ったおばさんは、にこにこ微笑んで見つめていた。

ヨッチちゃんと仲直りをしたわけではない。ヨッチちゃんは家に入って少年を見たとき、一瞬、なんでおまえなんかがここにいるんだよ、という顔をした。少年も、しょうがないだろ、とにらみ返して、そっぽを向いた。

おばさんがジュースのお代わりを取りに台所に立ったとき、「さつさと帰れよ」とヨッチちゃんに小声で言われ、肩を小突かれた。

少年も最初はそうするつもりだった。おばさんに嘘がばれるのが嫌だったし、嘘をついたままタケシくんの写真に見つめられて遊ぶ自分が、もつと嫌だった。

でも、おばさんはジュースを持って戻ってくると、二人に言った。
「タケシも喜んでるわよ、ヨッチちゃんに新しいお友だちができて」

⑥帰れなくなった。頬が急に熱くなり、赤くなって、そこからはいままでも以上にゲームに夢中になったふりをした。ヨッチちゃんも、ゲームのコントローラーを動かしながら、ときどき、テレビの画面を見つめたまま話しかけてくるようになった。そんな二人を、おばさんはずっと——ほんとうにずうっと、にこにこどうれしそうに見つめていた。

先に「さようなら」と言った少年が団地の建物の外に出ても、ヨッチちゃんはなかなか出てこなかった。放っておいて帰るつもりで自転車にまたがったが、このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった。困ったなあと思つてタケシくんの家のベランダを見上げていたら、窓が開いて、おばさんがベランダに顔を出した。少年に気づくと、「ちよつと待っててね」と笑つて声をかけ、フェンスからこいのぼりの竿をはずした。

しばらくたつて外に出てきたヨッチちゃんは、真鯉だけをつないだ竿を持っていた。

「すぐ帰らないとヤバイ？」

少年に顔を向けずに訊いた。

「べつに……いいけど」

「片手ハンドル、できる？」

「自転車の？」

簡単だよ、そんなの、と笑つた。道が平らだったら両手を離しても漕げる。

ヨッチちゃんはこのぼりを少年に渡した。

「おまえに持たせてやる」

「……どうするの？」

「ついて来いよ。タケシのこいのぼり、ぴんとなるように持つてろよ」

そう言つて、自分の自転車のペダルを勢いよく踏み込んだ。

少年はあわてて追いかける。風を呑み込んだこいのぼりは、尾びれまでぴんと張つて泳ぎはじめた。意外と重い。しっかりと竿を握っていないと、飛んでいってしまいそうだと。

ヨッチちゃんの自転車は団地を抜けて、細い道を何度も曲がつていく。片手ハンドルの運転ではなかなかスピードを上げられない。ヨッチちゃんも途中でブレーキをかけたたり自転車を停めたりして、少年を待つてくれた。「かわつてやろうか」と言われ、「ぜんぜん平気だよ」と応えると、ふうん、と笑われた。いままでは違つ——転校した頃の頃とも違つ笑い方だった。タケシくんと一緒だった頃もこんなふうにあつて笑つていたのかもしれない。そう思うと、急にうれしくなり、でも急に悲しくもなつて、竿をぎゅつと強く握りしめた。

河原に出た。空も、川も、土手も、遠くの山も、夕焼けに赤く染まっていた。

ヨッチちゃんは土手のサイクリングロードに出ると自転車を停め、少年からこいのぼりを受け取った。

「俺ら……友だちなんだつて？」

少年は、ごめん、どうつむいた。⑦おばさんが勝手に勘違いしただけだ、とは言いたくなかつた。

「べつにいいけど」

ヨッチちゃんはまたさつきのように笑つて、手に持った竿を振つてこいのぼりを泳がせた。

「タケシって……すごい奴だったの。サイコーだった。俺、いまでも親友だから」
「……うん」

「でも……おばさん、もう来るなって。ヨッチちゃんは新しい友だちをどんどんつくりなさい、って……そんなのヤだよなあ、関係ないよなあ、俺が友だちつくるのとかつくくんないのとか、自分の勝手だよなあ……」

ヨッチちゃんは、悔しそうに竿を振り回す。こいのぼりは身をくねらせ、ばさばさと音をたてて泳ぐ。

「こいのぼり、ベランダからだど、川が見えないんだ。俺らいつも河原で遊んでたから、見せてやろうかな、って」

へへっと笑うヨッチちゃんを、少年はじっと見つめた。ヨッチちゃんはそのまなざしに気づくと、ちよつと怒った顔になって、

「拾ってくれてサンキュー」と言った。

少年は黙って、首を横に振った。

「あその橋渡って、ぐるーっと回って、向こうの橋を通って帰るから」

向こう岸を指さして言ったヨッチちゃんは、行こうぜ、とペダルを踏み込んだ。

ハンドルが揺れる。自転車が道幅いっぱいには蛇行する。片手ハンドルで自転車を漕ぐのは、あまり得意ではなさそうだ。

少年はヨッチちゃんの自転車に並んで、手を差し伸べた。「持ってやろうか」と声をかけると、ヨッチちゃんは少し間をおいて「悪い」と竿を渡した。「べつにいいよ」と竿を受け取ったあと、ほんとうはもつと別の言葉を言わなきやいけなかったのかもな、と思った。でも、そういうのって、いいんだよ、もう、と竿を持った右手を高く掲げた。

こいのぼりが泳ぐ。金色にふちどられたウロコが、夕陽を浴びてきらきらと光る。

ヨッチちゃんの自転車が前に出た。少年は友だちを追いかける。右手で、友だちの友だちを握りしめる。振り向いたヨッチちゃんが、「転ぶなよお」と笑った。

(重松 清「友だちの友だち」より)

(注) けげん…不思議で納得のゆかないさま。

問1 ——線部①「こいのぼりを見つめた」とありますが、この時の「少年」の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 転校先でクラスの仲間たちと初めて会う前で不安な思いをしているので、その前に自分と仲良しになってくれる男の子がいてほしいと思っ

イ. 転校先でクラスの仲間と趣味があわずにつまらない思いをしているので、自分と趣味の合う男の子がいてほしいと思っ

ウ. 転校先でクラスの仲間とけんかをしてつらい思いをしているので、自分とけんか相手との仲裁をしてくれる男の子がいてほしいと思っ

エ. 転校先でクラスの仲間とうまくとけこめずにさびしい思いをしているので、自分と仲良しになってくれる男の子がいてほしいと思っ

問2 ——線部②『「ただいまーっ」とはずんだ声で家に帰る」とありますが、「はずんだ声」で言ったのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 初めて転校を経験して引越して間もないので、知らない町を探検するのが楽しく、すべてのものが新鮮に映って興奮しているから。

イ. 母親に内緒で町を探検しているので少し後ろめたい気持ちがあるが、わざと明るい声で帰宅してその気持ちを悟られないようにしているから。

ウ. 転校先の学校で友だち関係がうまくいっていないことを誰にも相談できずにひとりで悩んでいるが、そのことを母親に知られまいとしているから。

エ. 初めての転校先でつらいことばかりが多いが、明日からも負けずに新しい町に慣れていくように自分自身をばげまそうとしているから。

問3 ——線部③「いまは、ずっと昔のことに思える」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 転校したばかりの学校のクラスで人気者になり親友もできると期待していたのに、たった一週間のうちにクラスのみんなどの関係が急速に悪化してしまったのが信じられないということ。

イ. 転校先のクラスのみんなどの関係がうまくいっていると勘違いして、調子にのって言ったことが原因でリーダー格のヨツちゃんを怒らせてしまい、その絶望的な状態から早くぬけだしたいということ。

ウ. 目新しかった転校先の学校や町のようにすが一週間のうちにほぼ明らかになってしまい、わくわくした興奮や興味を失ってしまったということ。

エ. よそ者である自分を嫌うクラスの仲間の本心が一週間の間に身にしみてわかり、友だちを作るという希望が持てなくなってしまうということ。

問4 ——線部④「三年生の秋、交通事故で亡くなった」とありますが、このことをそれとなく暗示している表現を10ページの★より前の本文中から二十文字以上、二十五字以内でぬき出して答えなさい。(句読点などの記号も字数にふくめます。)

ア. ヨツちゃんのことをわが子の一番の友だちだと思っているおばさんに、誰とでも仲良くしてくれる小学生などそう簡単に見つかるものではないということを伝えられずにいる。

イ. わが子ともっとも仲の良かったヨツちゃんと自分がすぐに仲良くなったと思いきんではいるおばさんに、自分がヨツちゃんと友だちにはなれていないことをどうしても言えずにいます。

ウ. ヨツちゃんをととても親切で良い子だと思っているおばさんに、実はヨツちゃんにも転校生を仲間はずれにする意地の悪い一面があるということを告白できずにいる。

エ. ヨツちゃんが確かに自分にも親切にしてくれたことを思い出して、おばさんのいうことはその通りだと認めつつも、突然のヨツちゃんの心変わりが理解できずに困っている。

オ. 自分とヨツちゃんが友だちになったことで息子の友だちがふえたと喜ぶおばさんを見て、いまさら本当のことは言えず、二人仲良いふりをしてゲームをしつづけなければならぬと思つたから。

カ. 二人は友だちだとヨツちゃんの前ではつきりとおばさんに言われたので、やはりそうではない事実をきちんとおばさんに話さなければならぬと思つたから。

ク. 二人が友だちであると二人の前であえて言うことでヨツちゃんと自分を仲直りさせようとしてくれたおばさんの思いやりに、ヨツちゃんと話し合うことでこたえたいと思つたから。

ケ. ヨツちゃんと二人で遊ぶ姿にわが子を重ねてうれしそうに見つめているおばさんの気持ちを考えると、途中でゲームをやめて帰るのはとても残酷で申し訳ないことだと思つたから。

問6 ——線部⑥「帰れなくなった」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分とヨツちゃんが友だちになったことで息子の友だちがふえたと喜ぶおばさんを見て、いまさら本当のことは言えず、二人仲良いふりをしてゲームをしつづけなければならぬと思つたから。

イ. 二人は友だちだとヨツちゃんの前ではつきりとおばさんに言われたので、やはりそうではない事実をきちんとおばさんに話さなければならぬと思つたから。

ウ. 二人が友だちであると二人の前であえて言うことでヨツちゃんと自分を仲直りさせようとしてくれたおばさんの思いやりに、ヨツちゃんと話し合うことでこたえたいと思つたから。

エ. ヨツちゃんと二人で遊ぶ姿にわが子を重ねてうれしそうに見つめているおばさんの気持ちを考えると、途中でゲームをやめて帰るのはとても残酷で申し訳ないことだと思つたから。

問7 ——線部⑦「急にうれしくなり、でも急に悲しくもなつて」とありますが、この時の「少年」の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. ヨツちゃんが一瞬自分を友だちとして見てくれたように思われてうれしく思ったが、まだ実際には友だちと呼べる状態にはなっていないことを考えると悲しい気持ちになっている。

イ. ヨツちゃんがタケシくんに見せていた笑顔を取りもどしたことをうれしく思ったが、タケシくんがもうこの世にいないことに思い至つて悲しい気持ちになっている。

ウ. ヨツちゃんが今でもタケシくんに対する友情を持ち続けていることを知つてうれしく思ったが、自分のことは友だちと思つてくれていないことを思い出して悲しい気持ちになっている。

エ. ヨツちゃんが自分のことを友だちだと認めて言葉をかけてくれたことをうれしく思ったが、素直にその言葉に甘えられない自分の強情さがつくづくいやになり悲しい気持ちになっている。

問8 ——線部⑧「おばさんが勝手に勘違いしただけだ、とは言いたくなかつた」とありますが、この時「少年」は「ヨツちゃん」にどういうことを言いたかつたのですか。二十五字以上、三十字以内で書きなさい。(句読点などの記号も字数にふくめます。)

問9 ——線部⑨「ちょっと怒つた顔になつて、『拾つてくれてサンキュー』と言つた」とありますが、この時の「ヨツちゃん」についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 昔の親友への思いを素直に述べた自分を笑つた少年に戸惑いを覚えつつも、大切なこいのぼりを拾つてくれたこと心から礼を述べている。

イ. 少年の前で自分の心の弱さをさらけだしてしまつたことにいら立ちを覚えつつも、親友の身代わりともいえるこいのぼりを拾つてくれたことに対してはしっかりと礼を述べている。

ウ. いつまでも過去を引きずっている自分をあわれんでいる少年に怒りを感じつつも、親友の思い出のこいのぼりを拾つてくれたことに一応礼だけは述べている。

エ. 少年に対してタケシへの思いを見せすぎてしまつたことの恥ずかしさを感じつつも、亡き親友のこいのぼりを拾つてくれた少年に素直に礼を述べている。

問10 ——線部⑩「でも、そういうのって、いいんだよ、もう、と竿を持った右手を高く掲げた」とありますが、この時の「少年」についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 死後もなおタケシへの友情を持ち続けるヨツちゃんを見て、タケシの存在感の大きさを感じている。

イ. ヨツちゃんとたがいに心が通じあつて友だちになれたことが実感され、うれしさをおさえきれずにいる。

ウ. ヨツちゃんと友だちになるという夢をかなえてくれたこいのぼりに対して、感謝の気持ちを表している。

エ. 仲間はずれの原因にもなつた言葉に悩んでいたが、言葉がなくても心が通じることを知つて喜んでいる。